

英語史の研究

寺 澤 盾

昨今日本の一部の企業では事業のグローバル展開を目指して英語を社内公用語にする動きが見られる。日本の大学でも、世界各国から優秀な学生を集めるために英語による授業だけで学位を取得できるプログラムを設置するところが増えている。こうした英語のグローバル化は、世界的に見られる現象であるが、それに対しては賛成意見だけではなく懸念も示されている。2013年はグローバル化した英語のプラス面とマイナス面を論じた書物の刊行が相次いだ。オーストラリア国立大学教授でポーランド人言語学者 Anna Wierzbicka はリングア・フランカとしての英語の危険性を指摘し続けているが、*Imprisoned in English: The Hazards of English as a Default Language* (Oxford University Press) は彼女のそうした考えをあらためて表明したものである。多くの学問分野で共通語として英語が用いられているが、Wierzbicka はこうした状況で知らず知らずのうちに英語的思考を強いられた「英語の囚人」(prisoners of English) となってしまうことに警鐘を鳴らしている。Elizabeth J. Erling and Philip Seargeant, eds. *English and Development: Policy, Pedagogy and Globalization* (Multilingual Matters) も同じ問題意識に基づき、英語のグローバル化や外国語としての英語教育が世界の言語生態系や文化的アイデンティティーにどのような影響を与えるかを考察した論文集である。科学分野のリングア・フランカが英語であることに異論はないであろうが、Scott L. Montgomery, *Does Science Need a Global Language? English and the Future of Research* (University of Chicago Press) は科学分野で英語を用いることのメリットとデメリット、さらに科学言語としての英語の未来について興味深い考察を行なっている。

以下では、2013年1月～12月に刊行された英語史関連の文献をできるかぎり広く紹介していきたい。文献情報収集にあたっては三浦あゆみ氏のウェブページ A Gateway to Studying HEL (「2013年刊行文献」)を参照させていただいた。

1. 通史

まず国内で出版された英語史関連の書物としては、井口篤・寺澤盾『英語の軌跡をたどる旅——*The Adventure of English*を読む』(放送大学教育振興会)と寺澤盾『聖書でたどる英語の歴史』(大修館書店)が挙げられる。前者は放送大学ラジオ番組のテキストで Melvyn Bragg の *The Adventure of English* (抜粋)を読み英語の読解力を身に付けさせながら英語の歴史を学ばせるものである。後者は異なる時代に翻訳された

英訳聖書を比較しながら、過去 1500 年の間に英語におこったさまざまな変化を読者が「体感」できるようにしている。海外に目を転じると、またまた David Crystal 本が上梓された。妻の Hilary Crystal との共著 *Wordsmiths & Warriors: The English-Language Tourist's Guide to Britain* (Oxford University Press) は、旅行ガイドの体裁をした新たなスタイルの一般向け英語史本である。英語史上重要な場所（リンディスファーン、モールドン、ウィンチェスター）やチョーサー、シェイクスピアなどにまつわる場所をカラー写真で紹介しながら英語の歴史を旅する。Bill Lucas and Christopher Mulvey, *A History of the English Language in 100 Places* (Robert Hale) も上記の Crystal の本と同様にイギリス内外の 100 箇所を選び、その土地に関連する英語史上の興味深いエピソードをカラー画像を添えて説明する。

ほかに英語史を概説した書物としては以下のものが管見に入った：英語がどのように、またなぜ地球規模の言語になったのかを歴史家の視点から説く David Northrup, *How English Became the Global Language* (Palgrave Macmillan)；「英語とは何か」と問いかけ、英語の本質はその絶え間ない変化とそこから生まれるさまざまな変種であると主張する Tim William Machan, *What is English? And Why Should We Care?* (Oxford University Press)；さまざまな英単語の間にみられる意外な結びつき（本のタイトルにある haggard [憔悴した] と poltroon [臆病者] はもともと「タカ狩り」に関連する語であった）を教えてくれる Paul Anthony Jones, *Haggard Hawks and Paltry Poltroons: The Origins of English in Ten Words* (Constable)。

綴りの歴史を扱ったものとしては、Simon Horobin, *Does Spelling Matter?* (Oxford University Press) が挙げられる。Horobin は英語の綴りの歴史の変遷だけでなく、携帯メールや e メールにおける「綴りの乱れ」といった現代的な問題にもふれながら英語綴りの未来についても考える。

語彙史を扱ったものも数冊出版されたがいずれも個人的なものである。Horace Gerald Danner, *A Thesaurus of Medical Word Roots* (Scarecrow Press) は医学英語の語根をアルファベット順に挙げ、そのギリシャ語・ラテン語の語源を示し、さらにその語根を含む語群をリストアップしたもの。英語のタブー語やのしり言葉 (swearing) の歴史に関する研究としては、これまで主なものとして Ashley Montagu, *The Anatomy of Swearing* (1967) や Geoffrey Hughes, *Swearing: A Social History of Foul Language, Oaths and Profanity in English* (1991) などがあったが、Melissa Mohr, *Holy Sh*t: A Brief History of Swearing* (Oxford University Press) は英語の swearing の歴史を一般の読者向けにわかりやすく解き明かしている。Ulrike Krischke, *The Old English Complex Plant Names: A Linguistic Survey and a Catalogue* (Peter Lang) は古英語における植物名の語源や形態・意味変化を扱い、Michiko Ogura, *Words and Expressions of Emotion in Medieval English* (Peter Lang) は古英語・中英語にお

ける感情を表わす語の競合 (rivalry) や感情に関わる構文 (非人称や再帰構文) を考察する。

文法については構文文法 (construction grammar) の誕生以来、構文研究が盛んになっているが、構文に関する通時的研究も近年の新たな潮流である。秋元実治・前田満編『文法化と構文化』(ひつじ書房)は「文法化」と比べると、これまであまり通時的観点から論じられることの少なかった「構文化」について通時と共時の両面から分析した論文集である。Martin Hilpert, *Constructional Change in English: Developments in Allomorphy, Word Formation, and Syntax* (Cambridge University Press) と Elizabeth Closs Traugott and Graeme Trousdale, *Constructionalization and Constructional Changes* (Oxford University Press) も構文文法の枠組みを用いた英語構文の史的な研究である。ほかに、Cynthia L. Allen, “Dealing with Postmodified Possessors in Early English: Split and Group Genitives” など英語の所有・属格表現の通時的な研究論文を収録した Kersti Börjars, David Denison and Alan Scott, eds. *Morphosyntactic Categories and the Expression of Possession* (John Benjamins) も目に留まった。

意味・語用を扱ったものとしては、Begoña Crespo, *Change in Life, Change in Language: A Semantic Approach to the History of English* (Peter Lang) と Andreas H. Jucker and Irma Taavitsainen, *English Historical Pragmatics* (Edinburgh University Press) を挙げておく。Crespo は中英語から初期近代英語にかけておこった人の地位を表わす名詞の意味変化について社会変化など外的要因に注目して考察している。Jucker and Taavitsainen は、待望の歴史語用論の入門書で、discourse markers, terms of address, interjections といった具体的事例にふれながら初心者にもわかりやすく書かれており、各章末には練習問題が付いている。

II. 時代別

「OE」 まず、古英語に関する辞典(羽染竹一・鏡味國彦・齊藤昇共編『古英語(アングロ・サクソン語)辞典』(文化書房博文社)を挙げたい。本辞典は急逝された元東京学芸大学名誉教授羽染竹一氏の遺稿をもとに編まれたものであるが、複合語を含めて古英語の語彙を意味に応じて分類したもので、類義表現が多用される古英詩を読む際重宝しそうである。古英語の入門書である Matt Love, *Learn Old English with Leofwin* (Anglo-Saxon Books) は Leofwin というアングロサクソン時代の架空の人物が彼の家族とともに、当時の生活を説明しながら古英語の手ほどきをするといったユニークな設定になっている(イラスト(漫画)付き)。

古英語に関する研究書としては、以下のものが挙げられる: 1) Sara M. Pons-Sanz, *The Lexical Effects of Anglo-Scandinavian Linguistic Contact on Old English*

(Brepols); 2) Kenichi Tamoto, *The Macregol Gospels or The Rushworth Gospels: Edition of the Latin text with the Old English interlinear gloss transcribed from Oxford Bodleian Library, MS Auctarium D. 2. 19* (John Benjamins); 3) Gabriele Diewald, Leena Kahlas-Tarkka and Ilse Wischer, eds. *Comparative Studies in Early Germanic Languages: With a Focus on Verbal Categories* (John Benjamins). 1) はイギリスと北欧との関係について北欧からの借用語がどのようなことを教えてくれるのかといった問題を考察する(巻末に古英語期の北欧語借用語のリストや北欧語が用いられている古英語テキストのリストなどが付されている)。2) は古英語の行間訳ラテン語聖書の一つである *Rushworth Gospels* (*Macregol Gospels* としても知られる)の刊本で、今後の古英語行間訳聖書の研究に資するところが大きい。3) は古英語、古高ドイツ語などにおける動詞類(e.g. 受身の助動詞, 使役の助動詞 have など)の史的発達を比較しながら考察した論文集。

◀ME▶ 中英語関係では、まず Yoshiyuki Nakao, *The Structure of Chaucer's Ambiguity* (Peter Lang) にふれたい。これは2004年の中尾佳行著『Chaucerの曖昧性の構造』を深化させ英語で発表したものである。*Troilus and Criseyde*における曖昧性についてそれが生じるメカニズムを「2重プリズム構造」(double prism structure)という理論的枠組みを用いて示す。中尾氏と家入葉子氏共編の *Chaucer's Language: Cognitive Perspectives* (大阪洋書) は、認知言語学の観点からチョーサーの語彙・統語・語りを分析した6つの論文が収められている。中英語関連の論文集としては、Ad Putter and Judith Jefferson, eds. *Multilingualism in Medieval Britain (c. 1066-1520): Sources and Analysis* (Brepols) と Esther-Miriam Wagner, Ben Outhwaite and Bettina Beinhoff, eds. *Scribes as Agents of Language Change* (Walter de Gruyter) もリストアップしておく。前者は中英語期のイングランドにおける多言語使用の問題を勅許状、説教、宗教散文、聖書翻訳、年代記などの異なるジャンルのテキストに基づいて考察した論文集で、Haruko Momma, “Narrating the Battle of Hastings: Multilingual Britain and the Monolingualism of William of Malmesbury” などを含む。後者は中世において写字生が言語の変化にどのように寄与したかという興味深い問題を取り上げた論文集で、英語史関連の論文としては、Terttu Nevalainen, “Words of Kings and Counsellors: Register Variation and Language Change in Early English Courtly Correspondence,” Florian Dolberg, “Quantifying Gender Change in Medieval English,” Merja Stenroos, “Identity and Intelligibility in Late Middle English Scribal Transmission: Local Dialect as an Active Choice in Fifteenth-century Texts,” Alexander Bergs, “Writing, Reading, Language Change: a Sociohistorical Perspective on Scribes, Readers, and Networks in Medieval Britain” がある。

中英語研究では従来15世紀がやや等閑視されてきたきらいがあるが、谷明信・尾崎

久男共編『15世紀の英語——文法からテキストへ』（大阪洋書）は中英語と初期近代英語をつなぐ重要な時期の英語について多角的に考察した8本の論文（日本語論文6本、英語論文2本）を所収。

最後に、中世から近世にかけてのスコットランド英語の法律文書を言語学的に分析した Joanna Kopaczyk, *The Legal Language of Scottish Burghs: Standardization and Lexical Bundles (1380-1560)* (Oxford University Press) も挙げておきたい。

◀ModE▶ 2013年は近代英語（とくに初期近代英語）に関わる研究書が豊作であった。まず、日本人研究者によるものとして、盛田義彦『聖書英語の研究——欽定英訳聖書の身体語彙を用いた表現』（英宝社）と早川勇『啓蒙思想下のジョンソン辞書——知の集成を目指して』（春風社）にふれたい。『聖書英語の研究』は *bone of one's bones, apple of one's eye(s), in the sweat of one's face* など欽定英訳聖書における身体部分を用いた表現を収集して考察したもの。早川氏は、ジョンソンの辞書に引用された作品や作家の引用数などを分析し、この英語辞書を16～17世紀の英国における知識の総体と見なし、さらに18世紀英国の啓蒙思想のもとに位置づけようとする。

シェイクスピアに関するものとしては、Keith Johnson, *Shakespeare's English: A Practical Linguistic Guide* (Pearson) が目に留まったが、このシェイクスピア英語入門書は 'How hard is Shakespeare's English?', 'How to be polite in Shakespeare', 'Shakespearean pronunciation: how do we know?' など、興味深い話題が満載である。16世紀半ばから17世紀始めまで英国の女王として君臨したエリザベス1世の英語についても、Mel Evans による研究書 (*The Language of Queen Elizabeth I: A Sociolinguistic Perspective on Royal Style and Identity* [Wiley-Blackwell]) が上梓された。Evans は女王による助動詞 *do*、多重否定、関係詞 *who/which/which/the which* などの使用を社会言語学的観点から考察している。

初期近代英語期に活躍したほかの文人に関する研究も著されている。Hannah Crawforth, *Etymology and the Invention of English in Early Modern Literature* (Cambridge University Press) は Spenser, Jonson, Donne, Milton などの詩人が当時の英国のナショナリズム形成の動きの中でアングロサクソン研究者や語源学者などと深く関わっていたと主張する。Catherine Nicholson, *Uncommon Tongues: Eloquence and Eccentricity in the English Renaissance* (University of Pennsylvania Press) は Lyly, Spenser, Marlowe などの作家が駆使した装飾的文体を研究したものである。

16世紀のイングランドで版を重ねた実用書・道徳書である *Kalender of Shepherdes* を対象にした研究書も刊行された。Hanna Rutkowska, *Orthographic Systems in Thirteen Editions of the Kalender of Shepherdes (1506-1656)* (Peter Lang) は *Kalender of Shepherdes* の13の刊本を綴り字に着目して調査し、この作品の刊本に見られる綴り字改革の影響などを精査している。

初期近代英語に関する研究としてはほかに、selfを伴う代名詞の2つの機能(強調と再帰)に注目して研究した Ewa Kucelman, *Self-based Anaphora in Early Modern English* (Peter Lang) と Joan and Maria Thynne の間にかわされた書簡を代書人の使用、句読点、ポライトネスなどの観点から多角的に分析した Graham Williams, *Women's Epistolary Utterance: A Study of the Letters of Joan and Maria Thynne, 1575-1611* (John Benjamins) が挙げられる。

後期近代英語に関しては、まず Susie I. Tucker, *Protean Shape: A Study in Eighteenth-century Vocabulary and Usage* (Bloomsbury Publishing) を挙げたい。これは Johnson, Goldsmith, Smollett, Burke などが関わった雑誌を調査することで18世紀の人びとが自らの言語をどのように見ていたのかを考察したものである。後期近代のスコットランド英語(ロバート・バーンズ)やアメリカ英語に関しても研究が上梓されている: Alex Broadhead, *The Language of Robert Burns: Style, Ideology, and Identity* (Bucknell University Press); Radoslaw Dylewski, *Vernacular Grammar(s) of Mid-Nineteenth Century Northwestern South Carolina: A Study of Civil War Letters* (Wydawnictwo Naukowe UAM)。

◀PDE▶ 20世紀以降の現代英語(Present-day English)に関しては、英米の変種の違いを扱った野村恵造『ジョンブルとアンクルサム——イギリス英語とアメリカ英語』(研究社)が挙げられる。これは野村氏が *Daily Yomiuri* (現 *The Japan News*) で連載中のコラムを単行本化したもの。一方、Bas Aarts, Joanne Close, Geoffrey Leech and Sean Wallis, eds. *The Verb Phrase in English: Investigating Recent Language Change with Corpora* (Cambridge University Press) はコーパス(e.g. TIME corpus)を用いてイギリス英語、アメリカ英語、カナダ英語の動詞句にみられる現在進行中の変化を考察した論文集である。

なお、英語のグローバル化を論じた文献については冒頭で触れたので割愛する。

III. 論文集(すでにふれた論文集については割愛)

記念論文集としては、中野弘三・田中智之共編『言語変化——動機とメカニズム』(開拓社)が刊行された。これは名古屋大学英文学会第50回大会記念事業の一環であり、生成文法理論に基づき英語の統語変化を扱った論文、および認知言語学や歴史語用論に依拠して意味変化、文法化を論じたものなど22篇を収録。

学会の成果をまとめた論文集も多数刊行されている。2008年にケンブリッジで行なわれた第6回国際中英語学会のプロシーディングズである Richard Dance and Laura Wright, eds. *The Use and Development of Middle English: Proceedings of the Sixth International Conference on Middle English, Cambridge 2008* (Peter Lang) には 田口まゆみ氏による“Devotional Terms and the Use of the Bible in Nicholas Love's

Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ”が収録されている。Irén Hegedüs and Dóra Pödör, eds. *Periphrasis, Replacement and Renewal: Studies in English Historical Linguistics* (Cambridge Scholars Publishing) は、2010年にハンガリーで開催された第16回国際英語史学会 (ICEHL) で発表された論文の一部を収録したもので、日本人研究者による論文も含まれる: Fuyo Osawa, “The Loss of Lexical Case in the History of English: What is Behind Transitivity?”, Daisuke Suzuki, “The Historical Development of *no sooner ... than* and its Semantic Change”, Fumiko Yoshikawa, “Discourse Strategies in Margery Kempe’s Descriptions of her Pilgrimages”. Jacek Fisiak and Magdalena Bator, eds. *Historical English Word-Formation and Semantics* (Peter Lang) は2011年にワルシャワで開かれた International Conference on Historical English Word-Formation and Semantics の論文集で, Grzegorz A. Kleparski, “Historical Semantics: A Sketch on New Categories and Types of Semantic Change”などを収録。Gisle Andersen and Kristin Bech, eds. *English Corpus Linguistics: Variation in Time, Space and Genre. Selected Papers from ICAME 32* (Rodopi) には、2011年にノルウェーのオスロで開催された ICAME (International Computer Archive of Modern and Medieval English) 32 で発表された論文のうち, Christian Mair, “Writing the Corpus-based History of Spoken English: The Elusive Past of a Cleft Construction” など言語の変異をコーパス言語学の手法で研究したものが収められている。2012年に慶応義塾大学で開催された SHELL (Society of Historical English Language and Linguistics) の第4回国際大会の論文集である Michio Hosaka, Michiko Ogura, Hironori Suzuki and Akinobu Tani, eds. *Phases of the History of English: Selection of Papers Read at SHELL 2012* (Peter Lang) には3つの基調論文 (Joyce Hill, “Naming the Liturgical Year: Reflections on Vernacular Practice”, Hans Sauer, “Middle English Word-Formation: A Sketch”, Liliana Sikorska, “Malevolent Visitors: on Hosts and Hostiles in Medieval Romances”) を含む内外からの22篇の論文が収められている。

このほかにも英語史に関連する論文集は多数刊行されており、以下リストアップしておく: Andreas H. Jucker, Daniela Landert, Annina Seiler and Nicole Studer-Joho, eds. *Meaning in the History of English: Words and Texts in Context* (John Benjamins) は古英語の写本から近代英語の書簡や医学書まで、さまざまな時期のさまざまなジャンルをカバーしたもので、家入葉子氏の “The Positioning of Adverbial Clauses in the *Paston Letters*” も所収; Joanna Kopaczyk and Andreas H. Jucker, eds. *Communities of Practice in the History of English* (John Benjamins) は言語の変化は言語使用者間のインタラクシオンの場で起こるというテーゼのもと、networks of letter writers, groups of scribes and printers, groups of professionals という3つのコミュ

ニティーに焦点を当て英語の史的変化の実態に迫る; Manfred Krug and Julia Schlüter, eds. *Research Methods in Language Variation and Change* (Cambridge University Press) は英語における変異と変化の問題を扱った論文集で, Douglas Biber and Bethany Gray, “Identifying Multidimensional Patterns of Variation across Registers” など 23 論文所収; Hans Sauer and Gaby Waxenberger, eds. *Recording English, Researching English, Transforming English* (Peter Lang) は英語の発音・綴り, 語彙, 文法の変化から *Beowulf* の中国語訳を扱った論文まで英語史に関わる多岐にわたる論文を集めたもので, 日本人研究者による寄稿である Kousuke Kaita, “Old English *geweald habban/āgan* as a Stylistic Set Phrase, Compared with Old High German and Old Saxon Cognates,” Yuko Higashiizumi, “A History of *Because*-clauses and the Coordination-subordination Dichotomy”, Fuyo Osawa, “Impersonal and Passive Constructions from a View-point of Functional Category Emergence” なども含む; Daniel Schreier and Marianne Hundt, eds. *English as a Contact Language* (Cambridge University Press) は Olga Fischer, “The Role of Contact in English Syntactic Change in the Old and Middle English Periods” など言語接触によって引き起こされた英語の史的変化を中心に扱った論文 18 篇からなる。

IV. 学術誌掲載論文

2013年に国内の学術誌に掲載された英語史関連の論文を以下、学術誌別にリストアップしておく。昨年同様、国内紀要に発表された論文に関しては残念ながらスペースの都合上割愛せざるを得なかったが、『英語年鑑』の「個人研究業績一覧」を参照されたい。

〈*Studies in Medieval English Language and Literature* No. 28〉 Graham D. Caie, “Two Revolutionary Periods for the Text: The Fifteenth and the Twenty-First Centuries”; 〈*Studies in English Literature* English Number 54〉 Hiroshi Ogawa, “Ælfric’s Shifting Mode of Speech: Postscript on *Wite Ge* in the Peter and Paul Homily”; 〈日本英文学会第 85 回大会 Proceedings; 付 2012 年度支部大会 Proceedings〉 本多尚子「受益者受動文の歴史的発達について」、篠原結城「騎士ランスロットの祈りにみる貴さ——Maloryの創造的「改変」と「別れの場面」以降」、向井毅「*The Pylgrimage of Perfection* (1526¹, 1531²) に作者と印刷家の協同を探る」、小川直之「14世紀フランス語圏(フランスおよび十字軍国家群)文学における「夢の十字軍」」、縄田裕幸「屈折形態変化の統語的影響——英語史における「空主語」の消失を例として」、小川芳樹「通時的な「自立語化」と「構文化」についての統語的一考察」、柳朋宏「英語の歴史における2種類の「与格」」、保坂道雄「格と外在化——言語進化の視点から」、佐藤勝「「S+Vt+準動詞・節」の通時的一研究」、石崎保明「構文

回顧と展望

文法理論における文法化の扱いについて、鳥居佳江「トールキンの『サー・ガウエインと緑の騎士』に読みとるファンタジー」；〈『英文学研究支部統合号第6巻』（『関東英文学研究』第6号）〉高宮利行「マロリーのテキストを求めて」；〈『英文学研究支部統合号第6巻』（『関西英文学研究』第7号）〉今西雅章「エリザベス朝の独特の劇場空間とシェイクスピア的表現力——聴覚的効果と視覚的意味」；〈*English Linguistics* Vol. 30〉Yosuke Matsumoto, “On the Historical Development of Preposition Stranding in English”；〈『近代英語研究』No. 29〉Ryuichi Hotta, “The Diatonic Stress Shift in Modern English”, Katsuya Sugiura, “Synchronic and Diachronic Aspects of Retroactive Gerunds: With Special Reference to *Worth*”；〈『英語表現研究』30〉Yu Umemiya, “Assessing the List of Shakespeare’s Coinages through Comparison with the First Monolingual English Dictionary”.

(東京大学教授)